

心やみち

…被災地支援情報…

第81号 発行日 2005.1.7
被災地NGO協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
tel : 078-574-0701 fax : 078-574-0702
URL <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>
e-mail ngo@pure.ne.jp
口座番号 : 01180-6-68556 (郵便振替)



十年を迎えて 阪神・淡路大震災から

被災地NGO協働センター
代表 村井雅清

2005年1月17日午前5時46分をもって、あの6,432名を亡くした阪神・淡路大震災から丸10年を迎えることになりました。あらためて亡くなつた方々お一人おひとりのご冥福をお祈りいたします。

さて一言で10年といつても、私にとっては「やっと、10年か」という感じであり、正直言って「疲れた！」というのが本音です。

この節目を迎え、被災地は80%～90%が復興したと言われますが、何をもって80%や90%という数字がでてくるのか意見の分かれるところです。少なくとも私たちNGOという立場からすると、まず第一に見たいのは被災者一人ひとりの暮らしが再建できたのかという視点、そして第二は地域経済が回復しただろうかという点です。

私たちNGOは、震災の年から被災地の市民と「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」を開催してきました。ここでは「暮らしの再建」について一貫して議論してきたつもりです。そこで10年目を目前にしての昨年12月10日・11日の両日開催した同フォーラムでは、次の3つのことをこれからの大切なこととして確認しました。それは、①もう一つの生き方の選択、②最後の一人までを支えること、③震災文化の発信、です。

先述したように10年間暮らし再建を見据えてきたつもりですが、それは経済的な側面での暮らし再建を指すのではなく、生きがいも大切にする暮らしという考え方を積極的に取り込もうということでもあることに気づかされました。

とは言え、経済の再建がなければ日々の

暮らしは厳しい。被災地では「コミュニティ・ビジネス」という、もう一つの働き方も生まれました。これからは、どんどんこの領域が拡大していくでしょう。それは、暮らしと地域が一体化しなければ安心で、安全な社会が築けないということにも気づいたからです。

こうして10年を振り返ると、復興はやつと緒についたということかも知れません。ただこれから先は、これまでのようなこともすれば息苦しさもともなう復興過程ではなく、希望や夢さえ見ることのできる復興であるような気がします。

さて悲しいことに、昨年は日本列島を襲う水害が連續し、10月末には震度7を観測した新潟県中越地震が発生しました。また海外においては、年末の押し迫る12月26日に20世紀以来最大の津波災害となった「スマトラ沖地震津波災害」が発生しました。この災害による被害は10カ国にまで及び、死者150,000人を超え、あらためて自然の驚異を見せつけました。

さらにイラクでは、無辜なる市民が毎日のように犠牲となる衝突が続いている状態です。こうして国際社会では、紛争災害や「自然」災害が後を絶たず、他方一日の生活費が1ドル以下という貧困を余儀なくされている人々は13億を超えるという事態は変わっていません。いわれるところの「人間の安全保障」がかけ声だけに終わらないようにしなければなりません。担い手は私たち一人ひとりです。あらためて地球市民の一人という自覚と希望をもち、新年の1ページを開きたいと思います。

震災10年

市民とNGOの「防災」国際フォーラム

被災地NGO協働センター 福田和昭

2004年12月10・11日の2日間に渡って、「震災10年 市民とNGOの『防災』国際フォーラム」が開催されました。このフォーラムはもともと1995年の12月に最初に開かれ、それから震災5周年の2000年までは毎年、開催されてきたものです。今回、震災10年を機に、久々の開催となりました。

◆ NGOと市民と国際、そして防災

震災の年の冬、神戸では「アジア防災政策会議」という政府間のサミットが開かれました。

私たちのフォーラムは、もともとはこの政府間会議に相対するものとして企画されました。「この被災地にあってこそボランティアの活動が政府や行政、社会を変革しうる運動性を伴う内実形成と、併せて神戸から国内外にその現状を発信し、かつ政府への市民（NGO）のスタンスを打ち立てたいという思いも強かった」とは、当時の事務局長の草地賢一さん（故人）の弁。

そして実行委員長の芹田健太郎さんは、「市民とNGOの協働でこのフォーラムが作られるべきであること」

「できるだけ多くの団体を巻き込んでネットワークを組むこと。そしてそれは日本人の団体にとどめず、中国人、韓国・朝鮮人、インド人、欧米人の団体へも当然呼びかけることを主張されました。

「市民」と「NGO」には、そうした幅広い市民と共に作り上げるフォーラムという思いが込められています。そして「国際」には海外からの参加者を得るだけでなく、被災地内の外国人県民、市民の団体が日本人の参加者と共に語り合うということも含まれています。

「防災」については、私たちの生



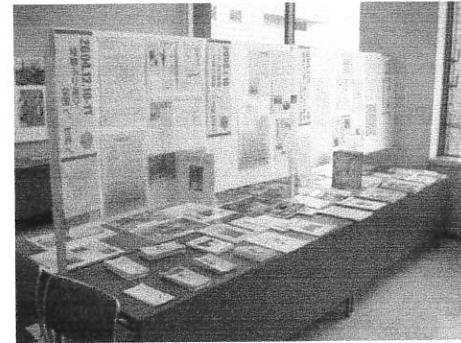
中越地震や台風災害もテーマにした緊急シンポジウム



子ども達に耐震建築を伝えたシェイクテーブルテスト



多文化共生のシンポジウムに熱心に耳を傾ける参加者



震災10年の災害救援やフォーラムの歩みをたどる展示

活感にはなじみにくいものがありました。何となく行政が住民に向かって啓蒙するような感じもあり、そこで『防災』とかっこを付け、「防災」は市民と政府が協働して始めてその実があがるということを訴えたいと考えました。

すこし長めのフォーラムの名称、実はそんな思いが込められているのです。

◆市民の声を世界に

「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」では、毎回最後に「神戸宣言」を採択しています。

こうした会議の採択文は、予め準備された文章をそのまま決議することが多いのですが、この「神戸宣言」については、毎回当日まで議論を重ねて、文章を作り上げています。今回も全ての分科会に記録担当のボランティアが入り、各部屋で議論された要旨を集めて、最終日の昼まで推

敲を重ねました。

こうして出来た「神戸宣言」ですから、2日間に渡って繰り広げられた議論の要素を、ぎっしり盛り込んでいます。そのもとになった各分科会の議論も、震災から10年間に渡る市民の活動の経緯や思いを練り込み盛り込んだものです。

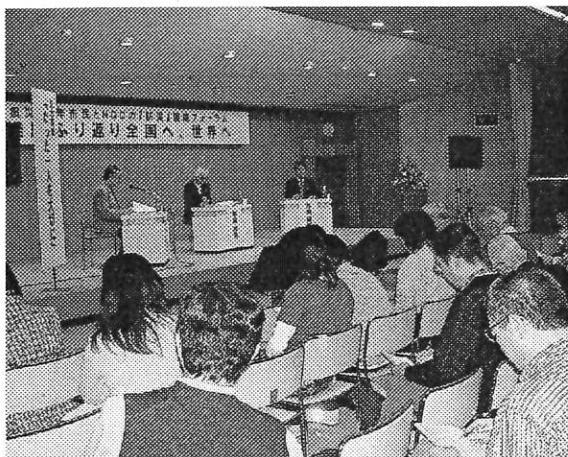
ですからこのA4版で1ページの文章には、被災地の10年が全て盛り込まれていると言っても過言ではありません。一言一言に、経験と実践と思いの裏打ちがあります。

震災10年を迎えた翌日、1月18日から始まる「国連防災世界会議」には、この「神戸宣言」を携えて被災地のNGOが参加します。20日には関連シンポジウムとして「震災10年と市民社会」を行いますので、ぜひみなさんにいらして下さい（詳しくは同封のチラシをご参照下さい）。

阪神大震災10年を機に、防災や暮らし再建の道しるべを全国
・世界に発信しようと「震災10年 市民とNGOの『防災』国
際フォーラム」が10、11両日、神戸市で開かれた。80のシンポ
ジウムや文化行事などに、市民や災害ボランティア、NGO・
NPO関係者ら延べ約1000人が参加。新潟県中越地震など、
今年相次いだ地震や台風、豪雨災害で、この10年間の経験や教
訓が生かされたかなどのテーマで語り合った。三つのシンポの
様子を報告する。

「防災」国際フォーラム

10年の成長



神戸市で開かれた「震災10年 市民とNGOの『防災』国際フォーラム」

「阪神・淡路から何を学ぶか」
(神戸市中央区) の若手研究者6人が、阪神大震災の教訓などを話し合つたパネルディスカッション。6人はいずれも30歳代前半。出身の神戸の変わり果てた街並みに衝撃を受け、都市防災の道に進んだ研究員も。その体験や最近の災害現場に入つて感じたことなどが報告され、参加者の反応も大きかった。NPOやボランティアによる災害支援を研究する菅原志保・専任研究員

は新潟、福井の水害を例に「最近の災害ではボランティアセンターが直後に設立される。(この10年で) 自発性を生かした被災者救援の仕組みづく

りは進んだ」と話した。一方、災害と経済が専門の永松伸吾・専任研究员は、中越地震の被災地を歩いた。「再開した商店に置いてある商品と同じ物が救援物資として届く。(商品が売れなくなれば) 経済復興に少なからぬ影響があるのでは」と話し、支援のあり方に工夫の余地があることを指摘した。

自発性生かす救援活動評価

成長

孤立型社会の弊害浮き彫り

「高齢者・障害者への災害直後の支援とその後の対応」
「阪神高齢者・障害者支援ネットワーク」副代表の黒田裕子さんの司会で、中越地震と台風23号の被災地で支援活動を行つた神戸協同病院院長の上田耕蔵さんは、エコノミークラス症候群などの関連死について分析。「車中死は、阪神大震災で浮き彫りになつた高齢社会の問題と共に、孤立型社会の問題をクローズアップした」と指摘。被災地で三つの災害拠点病院が半壊するなどして機能が果たせなかつた背景について「病院の慢性的な財政難がある」と明かした。

「たつ一人を大切に」
「プラザの蓮本浩介さんらが、情報伝達・把握、心のケアなどのテーマで語り合つたシンポ」

芹田教授は「最大多数の最大幸福」を原理としていては、少数者は切り捨てられるままになると指摘。「『最後の1人』が幸福になることが全員の幸福につながる」と少數者を徹底して重視する社会への転換を主張。柳田さんは「これほどNPO、NGOが出でてきたのは日本史上初めて。日本を変えていくきっかけになると期待している」と

特別養護老人ホームを運営する社会福祉法人神戸福祉会理事長の中辻直行さんは、「介護保険導入後、初の大規模災害となつた中越地震では、(介護保険事業者が多くの高齢者の居場所などを把握しているため) 安否確認が迅速に行われた」と評価。半面、「ケアマネジャーらに緊急対応は義務付けられていないため、個人の資質に頼らざるを得ない」と指摘した。

小千谷、十日町市の避難所などで医療活動を行つた神戸協同病院院長の上田耕蔵さんは、エコノミークラス症候群などの関連死について分析。「車中死は、阪神大震災で浮き彫りになつた高齢社会の問題と共に、孤立型社会の問題をクローズアップした」と指摘。被災地で三つの災害拠点病院が半壊するなどして機能が果たせなかつた背景について「病院の慢性的な財政難がある」と明かした。

「たつ一人を大切に」
「プラザの蓮本浩介さんらが、情報伝達・把握、心のケアなどのテーマで語り合つたシンポ」と

市民とNGOの「防災」国際フォーラム 震災10年 神戸宣言

阪神・淡路大震災から10年前にした12月10、11の両日、神戸市内で「震災10年 市民とNGOの『防災』国際フォーラム」を開催し、「経験ふり返り全国へ、世界へ」をテーマに、厳しかったこの10年をふり返り、これからの10年の展望について語り合った。

フォーラムには自主企画、参加企画あわせて80の語りと討論、集いなどの催しが開かれ、バム地震を経験したイランからのNGOをはじめ、全国から多くの市民が参加し、新しいきずなを結んだ。震災10年前に日本列島は相次ぐ台風と豪雨災害、そして新潟県中越地震に見舞われた。これらの災害で大きな被害を受けた人たちと阪神・淡路の地は強い連帯で結ばれた。私たちは、同じ苦しみが繰り返されていることに気持ちは揺らいだ。10年間発信し続けてきた私たちの経験と学びが、果たして役立ったのかどうか。検証は10年を超えてさらに継続していくことを話しあった。

私たちは1995年12月に第1回のフォーラムを開催し、被災者と被災地の「くらし再建」を実現するための行動指針として、「語り出す」「学ぶ」「つながる」「つくる」「決める」の5つのキーワードを切り出した。第2回フォーラムではこれに「育てる」を加え、6つの言葉を心に刻みながら被災者とともにこの10年を歩んできた。震災10年の節目にあたって、この6つのキーワードに沿った行動が、新しい社会を引き寄せることができたかをまず自らに問い合わせみたい。

この10年は、被災地のみならず全国的に大きな時代の転換期を迎えていた。分権・自治の進歩、公的介護保険制度と障害者支援費制度の発足、男女共同参画社会への環境整備、NPO法の成立と市民活動の活性化、多文化共生社会の認識の高まり、持続可能な社会へのアプローチ、経済環境の変化による国や地方自治体の財政悪化など、社会全体の変革が急速に進んだ。私たちの「くらし再建」はまさに、こうした歴史的な環境変化のなかでの取り組みでもあった。

震災直後のつらい避難所での生活から、仮設住宅、復興住宅への激しい変化に翻弄された被災者に、多くのボランティア活動グループは寄り添い、励まし、自分の言葉で希望や訴えを語るよう働きかけてきた。被災地に広がる"寺子屋"風のさまざまな講座や学習の場は、市民の視点で企画・構成する力を養い、人びとが集う空間となっている。また私たちは、数多くの市民活動グループの広報誌紙や、地域メディアとしてのコミュニティFM放送局の展開に、人と人、人と課題をつなぎ、情報を共有する大事な役割を見出している。国内外で起こる災害へいち早く救援活動を繰り広げるネットワークもまた、危機と困惑の中で積極的に連帯し、支えあい、助けあう大切なつなぎづくりにほかならない。

この10年で、市民活動は提言する力を身につけてきた。提言することによって市民に自らの考えを示し、新しいビジョンをつくり、ともに行動することを呼びかけてきた。この市民活動のうねりを一過性のものに終わらせず、みんなで育て、伸ばしていく努力を続けている。

最も重要な「決める」は、これらキーワードの有効性を図るモノサシである。くらしと地域をより良くしていくために、多様な選択肢の中から進むべき道筋を自らで決めることの重要性を、私たちは学んできた。

私たちはこの6つの言葉を大事にしながら、くらし再建と新しい市民社会形成への基軸として、次の3点をフォーラムで確認した。

- (1) もうひとつの生き方を選択する
- (2) 最後の一人まで支える
- (3) 震災文化を伝えていく

私たちが復興10年の中から学びとったこの3つの視座を、今後の行動の里程碑として具体的な活動や事業に結びつけていきたい。私たちは、10年間の変化にとどまらず、日々起こる新しい課題と向き合いながら、自省の気持ちを忘れることなく、これから始まる10年へ向けて、志を同じくする人たち、とくに若者や子どもたちとも心を結び、力を込めて歩み続けたい。

10年前に、今日のような市民活動の広がりと社会の変化を、私たちはどれほど見通せただろうか。そしていま、社会が変わっていく確かな胎動に気づく。目を凝らせば、次の社会の姿が見えてくるではないか。

2004年12月11日
震災10年 市民とNGOの「防災」国際フォーラム 参加者一同

震災が つなぐ 全国ネットワーク

新潟県中越地震

鈴木隆太の被災地レポート

被災地NGO協働センターの鈴木隆太です。

12月28日の朝、新潟・中越地震の被災地から神戸に戻りました。

今回は滞在日程は2日間という短い期間でしたが、現地の状況をいろいろな方からお話を聞きしたり、現地の状況を見て参りました。

今回は、主に小千谷市を中心に回らせてもらいましたが、すでに雪が20cm~30cmほど積もっていて、雪はその間降り続いている、という状態です。

車の移動も、消雪パイプが走っている道路などは雪が無いため大丈夫なのですが、スタッフレスを履いていても少し積もっているところは滑ってしまう、というような状態でした。

しかし、地元の方々としては、「これからが冬の本番」と言われていましたが、これからこの雪がもっと積もり、じっと耐える冬がやってくるとのこと。本当に大変な状況のなかで生活をしていかなければいけない、という印象を受けました。

今の段階では、特に何をする、ということよりも、雪が降りはじめるまでに家などの片付けなどに追われていて、雪がはじまり、今はとにかくゆっくり休みたい、というのが本音のようです。

もう少し、春が近づくまではなかなかこれからどうしていくのか、ということを決められない、とのことも言われてきました。雪の状況で、どのような事が起こるか、この地震のあとについては誰もが予測できないという現実もあります。

そんな中、下記のように、皆とちぎのみなさんからも提案が出されています。

◆越冬します！ベースキャンプ地、再々々移転。川口の和南津に。

冬。12/21、今日も雪が降っています。これまでいた中越センター資材基地「蒼丘の杜・スパーク川口」の屋内ゲートボール場から、里の川口町和南津地区に本部を移転しました。地域の自治会長さんなどの仲立ちで空家になっていた民家をお借りすることができ、電気、ガス、水道、トイレ、風呂を復旧して「春の大ボランティア作戦」の準備をはじめます。

冬の間はこれからの長い復興に関わる様々な智慧を提供する“寺子屋”を定期的にやりたいと思います。まずは、島原、神戸などこれまで被災地になって経験してきた智慧を伝える場として現代版“梁山泊”を目指します。地元の人とよそ者（ボランティア）が「どうなんだべ」と話ができる場にしたいと思います。

このように、寺子屋などを開催していくながら、現地の方々との関係づくりをしていくつつ、智恵をこの新潟に集めていく、ということや、広くはたくさんの方々とのネットワークづくりをしていく、ということがとても大事だと感じております。

今回の新潟の中越地震は、その地域だけの問題だけではなく、これから社会にも影響していくことが沢山あります。それは、例えば自然との関係であったり、農業のこと、少子高齢化社会のこと。

これらのことと新潟の方だけでな

被災地NGO協働センター 鈴木隆太



長岡市陽光台仮設住宅、全村避難の山古志村の方々が住んでいる（12月下旬撮影・都市生活コミュニティーセンター池田さん提供）

く、広く様々な方々と連携をとりながら、復興の道筋を模索できるようなサポートができればと思っております。

まだ冬ははじまったばかりです。

そして、つい先日も、大きな地震による津波被害が10カ国にも渡って被害を及ぼしております。この災害によって、新潟が忘れられないよう、今回の津波による被害同様、新潟にもこれからも目を開けていただけたらと思います。

被災地
の現場
から

スマトラ沖地震津波・現地視察報告

(スリランカ)

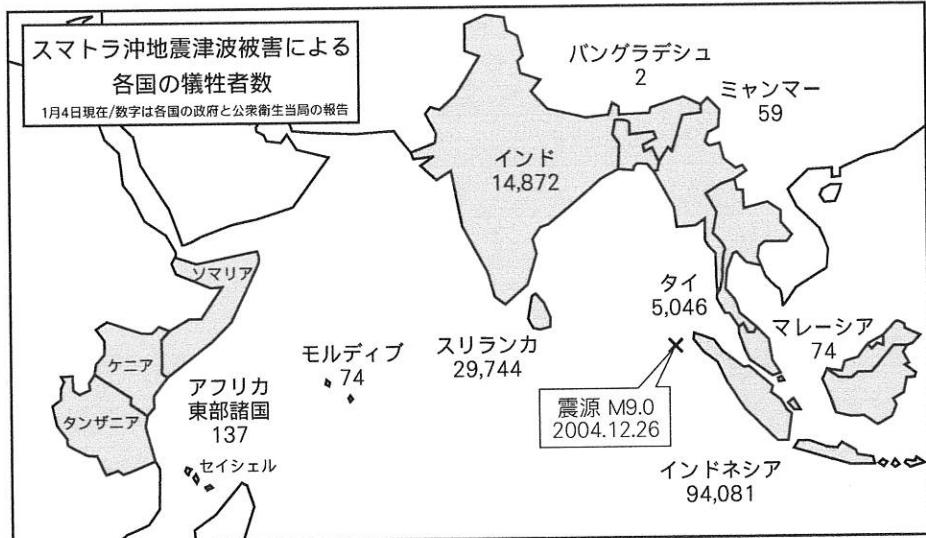
CODE 海外災害援助市民センター 斎藤容子

◆2004年12月31日

12月26日、なんということか……去年のイラン南東部バム地震が起きたその1年後の同じ日にまた最悪な事態が起きてしまった。そして2年連続して、村井事務局長と被災地へ飛ぶことになった。

12月31日にスリランカ、コロンボに無事到着する。飛行機を降りると湿気の含んだ熱気が身体にまとわりつく。12月30日に日本を出発し、香港、シンガポールを経由するという長い道のりを経てついに到着。シンガポール発スリランカ行きは乗客よりも空席が多い。空港に到着すると、すぐに「外国からの救援団体はこちらへ」というプラカードを持った女性が立っていた。声をかけるとパスポートを集められどこかへ行ってしまった。私たちは空港の災害対策本部のようなところへ通され、団体名などを記入する。そして既にパスポートに入国印が押されたパスポートを持って女性が帰ってきて、どうぞと渡された。すばらしい対応で驚いた。空港を出てみると、思った以上に静かだった。インドの街を想像していただけに、空港も町中も人で溢れているのかと思っていたが、どちらかといえば閑散とした様子だった。援助団体も既にピークは終えているのか、私たちの他に一人の女性だけだった。空港には今回お世話になるYMCAのボランティアさんと運転手さんが迎えてくれた。車の中で津波被害について彼が行ってきた場所に基づいて話を聞く。被災地への道が被害を受けているので、相当移動に時間がかかりそうだということがわかった。明日には恐らく南部のほうには行けるだろう。

車の中で彼がひどい被害はこの辺りと言って地図を指したのが一部の地域を除いたすべての海岸沿いだった。そして「ツナミ」という言葉を私たちは知りもしなかった。何が起こったのかと言われても、目の前にあるものを見て判断してくれとしかいいようがなかった。歴史の中には2000年ほど前に大きな波が襲つてきたと見たことはあるような気はするがそんなことは歴史のことだった。スリランカには地震や洪水などという自



然災害は本当になかったんだ。これが初めて目に自然災害だ。」と話された。彼は普段は銀行に勤めているが、今は緊急事態なのでYMCAボランティアとして手伝っている。2人の息子さんも被災地に行かれているということだった。

スリランカのキリスト教信者は全体の約7%と言われている。空港からコロンボの街に入るまでにキリスト教に関連した像がたくさん道路沿いにあったので不思議に思い聞いてみるとその地域にキリスト教信者が固まって居住しているということだった。シェルトンさんは今は別の地域に住んでいるが生まれはその地域だった。

そして、今日は宿泊所へと連れて行ってもらい明日YMCAで総主事の方々にお会いする予定となった。

◇斎藤スリランカ日記

～スリランカと日本の歴史～

私たち日本人にとって、スリランカと言えば“セイロンティー”として名高い紅茶でしょうか？そのほかは？日本がスリランカを第2次世界大戦の時に爆撃したことがあると知っている人はどれくらいいるでしょうか？と書いている私も全く知らなかったのですが、知ったのでここで紹介したいと思います。

1951年9月に行われたサンフランシスコ対日講話会議にセイロン代表として出席したのがジャヤワルダナ大蔵大臣（当

時）。ソ連が提案した日本への制限案に反対し、「軍隊の駐留による被害や我が国の重要な生産品である生ゴムの大量採取による損害は当然賠償されるべきである。しかし、その権利行使するつもりはない。なぜなら、仏陀の“憎悪は憎悪によって止むことなく、愛によって止むとの言葉を信じるからである。ソ連の修正条項に我々が同意できない理由は、制約をつければ日本が宗主権と平等と威儀を取り戻すことが不可能となるからである。」（「地球の歩き方」より一部抜粋）と演説し参加国に寛容の精神を求めたと言われています。スリランカ人の中ではとても有名な演説であるにも関わらず、助けてもらった日本人の私が知らないというのは、なんと恩知らずなことかと恥ずかしくなりました。

◆2005年1月1日

朝YMCAへと行き、スタッフの方々にお会いする。今日は新年のためスタッフもいつもよりは少なめということだった。最初に簡単な被害状況の説明を受けた。被害は、昨日もシェルトンさんから聞いたように一部の北部を除いてはすべてが被災地という状況。もっともひどい被害は南部と東部である。そして、今日はその南部へと行くことになった。しかし、道路がどこまで行けるかわからないが、行けるところまで行ってみようということになり、車に乗り込む。そし

て1時間後被害が徐々に見えてくる。最初の被災地マラトゥワに入る。そこからは被害の程度はあるもののすべてが流されたということだったのかと理解できる。目の前が海のところで、片づけをしている人々がいたので話を聞いてみることにした。彼らは、突然波が襲ってきた。それがなんだったのかも私たちはわからないし、後でそれが“ツunami”というものだったと知ったということだった。突然にすべてを失ったと話した。子どもを抱えた女性は私が一人で歩いているところに、この子の服を下さい。お金を下さいと言ってきた。彼女は被災者のすべてを代弁しているかのように見えた。突然すべてのものを失った人々にとって、可能性のありえそうなことはすべて言ってみているという感じがした。私が「何ももっていないの。ごめんなさい。」と言っても彼女にはわからない。本当に彼女たちを支援するということは何なのか、私たちに何ができるのかを考えさせられる。ある地点では、多くの人が低地に水が貯まり池のようなものになっているところに集まっている。何かと聞くと「1回目の津波で、道路を走っていた観光バスが流され、その上に2波が来て、バスの上に土が覆い被さる状態になり多くの方が亡くなつた。その遺体を今も探しているところだ」と言われた。車を降りて見に行こうとは思わなかつたので、出てきたかはわからないが、見に行った人によればブルドーザーで掘り返しているという状況で臭いがきついということだった。最終的には4時間車で南部へ行き、アンバランゴダという地で折り返すことになった。そこから先は道路が被害を受けているので、最南端に行くには違う道を使って6時間走らなければいけないということだった。しかし、アンバランゴダまでも私たちにとっては充分な衝撃で言葉を失う状況だったが、ここはまだ被害が少ないとこだという。

コロンボへと戻り、夜にIMADR（イマダル）という反差別国際運動の理事をされている女性にお会いし、情報交換をする。現在は緊急期のためとりあえず配れるものを配るという状況にある。しかし、今後中期的な復興に向けて考えていかねばならず、小さな漁村な

ど壊滅的な被害を受けたところを支援したいという話だった。

◇斎藤スリランカ日記

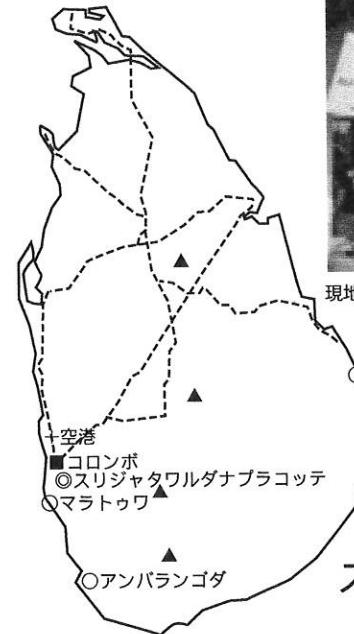
～おしん親善大使～

私たちの案内をしてくれた男性から「日本のテレビ番組を知ってるよ」と言われ、なんていう番組かと聞くと「おしん」でした。イランでも「おしん」は本当に有

名でした。おしんというだけで、ひとつ会話が弾むと言ってもいいぐらいかもしれません。しかし、私は「おしん」を実際に見たことはありません。有名なおしん役の子どもが船に乗せられ、泉ピン子さんが泣き叫んでいるという場面ぐらいは知っていますが、後はまったくわかりません。しかし「おしん」のおかげで日本から来たというと「おしん」の世界の精神を持っている国だなと思われるようです。どのような精神だったんだろうと、海外に出る前には一度は「おしん」を見るべきだなと思いました。まさに「おしん」は親善大使と言ってもいいでしょう。

◆2005年1月2日

いよいよ今日は東部へと移動します。3日間の予定です。その内2日間は移動です。まさか本当に1日かからないだろうと正直思っていたのですが、本当にかかりました。今日の朝9時半にコロンボを出て、スリランカを横断したのです。最終目的地のカルムナイに到着したのは夜8時半でした。距離的に考えるととてもなく遠距離なわけではないのですが、なぜ11時間もかかったかというとスリランカ中部は山が連なっています。大自然に囲まれた山を越えなければいけないのです。確かに山越えは細い道ですし、大変なのですが、あまりにも美しい自然に囲まれ、滝が多く流れ、猿が私たちを出迎えてくれ、それほど苦に感じませんでした。どちらかと言えば、それを超えてからのほうがただひたすら走るのみで大変でした。また東部では昨日大雨が降



現地の救援事務所（田中裕子さんを通じて提供）

スリランカ地図

り（スタッフの話では300㍉/1日）、それが洪水となって街を水浸しにしてしまいました。途中川が増水し、水が溢れているところを渡らなければいけませんでした。ただでさえ、衛生状態が津波によって悪くなっているところを、このような洪水で水たまりができ、衛生環境をさらに悪化させていると思われます。既に夜で、状況はよく見えなかったのですが明日は被災地へ視察に行くので被害の状況がわかると思います。

◇斎藤スリランカ日記

～哀悼の白旗～

コロンボ市内を走っていると、白い旗をつけて走っている車を見かけます。車のみならず、バスやスリーウィラーという三輪車のタクシーにもついています。ガイドがあの白旗はすべて市民が今回の災害に対して哀悼の意を表すものとしてついているものだと教えてくれました。それはよく見てみると、家の軒先、街中、店先などあらゆるところに白旗が取り付けられています。コロンボ市内だけかと思っていると、他の市でも一緒に国内すべての人々が今回の災害に対して、悲しみを共有するという思いで白旗を掲げていることが感じられました。

復興支援のための募金を募集しています！

郵便振替

口座番号：00930-0-330579

加入者名：CODE

※通信欄に「スマトラ津波」とご記入下さい

募金総額の15%を上限として事務局運営・管理費に充てさせて頂きます。

震災10年

1.17関連行事ガイド

2005年は震災10周年を迎えることもあり、被災地では様々な行事が予定されています。被災地NGO協働センターの関わっているものをお紹介いたします。

1月15日
土曜日

<p>震災10周年炊き出し大会 詳細時間未定 人と防災未来センター</p> <p>労働組合・連合のシンポジウム。CODEの展示を出展予定。</p> <p>メモリアル・カンファレンスX 人と防災未来センター 15日・16日の両日開催</p>	<p>みくら大集会オプションツアー 14:00~16:00 NGO協働センター</p> <p>阪神・淡路大震災10周年記念 大規模災害対策シンポジウム 神戸国際展示場2号館12:00~16:00</p> <p>国際協力ひろば特別シンポ神戸から世界へ 神戸文化ホール 13:30~16:00 ※受付終了</p>	<p>1.17を前にみんなで鍋を囲もう 須佐野公園前・ラミ中 晩過ぎから 当日問合せ ラミ中078-671-7625</p>	<p>人と防災未来センターで行われる炊き出し大会への参加を予定しています。</p> <p>みくら大集会の詳細は、前号に同封したチラシをご参照下さい。</p> <p>NGO協働センターが同居している「ぐるうぶえん」と、前身のちびくろ救援ぐるうぶ関係者・ボランティアの集いです。</p> <p>村井雅清がパネリストとして出演。杉良太郎さんたちが来場します。既に受付は終了しています。</p>
---	--	--	---

1月16日
日曜日

<p>事務所で追悼 5:30~6:00頃 ※1</p>	<p>1.17 KOBEに灯りを in ながた JR新長田駅前 10:00~22:00 実行委員会事務局 TEL 078-574-2408</p>	<p>※1 事務所の中庭に立っている慰霊音像を囲んで、スタッフやボランティアの方々と「その時」を過ごしています。</p> <p>新長田駅前の追悼のろうそくを灯す催しも、すっかりおなじみになりました。毎年一緒に参加しています。</p>
-------------------------------------	---	--

1月17日
月曜日

<p>ピーストークマラソンin兵庫 ポートピアホテル 14:00~18:00 ※受付終了</p>	<p>震災総合フォーラムの第2セッション。CODEの斎藤容子がパネリストとして出演。藤原典香さんが出演。既に受付は終了。</p>
--	--

1月19日
水曜日

<p>阪神・淡路大震災総合フォーラム 被災者の「いのち」を守る ポートピアホテル 午前</p>	<p>阪神・淡路大震災総合フォーラム 地域から広がる「いのち」の助け合い ポートピアホテル 午後</p>	<p>震災総合フォーラムの第3セッション。阪神高齢者・障害者支援ネットワークの黒田さんがパネリストとして出演。</p>
---	--	---

1月20日
木曜日

<p>阪神・淡路大震災総合フォーラム 創造的市民社会づくり ポートピアホテル 10:00~12:40</p>	<p>阪神・淡路大震災総合フォーラム 地域における産業の新たな展開 ポートピアホテル 午後</p>	<p>震災総合フォーラムの第5セッション。村井雅清やYOGONの野崎さん、コープこうべの柳瀬さんらがパネリストとして出演。</p>
--	---	---

1月21日
金曜日

<p>阪神・淡路大震災総合フォーラム 災害に強い住まい・まちづくり ポートピアホテル 午前</p>	<p>阪神・淡路大震災総合フォーラム 災害に強いまちづくりと社会基盤形成 ポートピアホテル 午後</p>	<p>震災がつなぐ全国ネットワークや智恵のひろば準備室ともども参画しています。要申込。同封のチラシをご参考下さい。</p>
<p>災害ボランティア世界会議 神戸国際会議場 10:00~16:30 同封のチラシ参照</p>		

1月22日
土曜日

<p>阪神・淡路大震災総合フォーラム 21世紀の震災復興と国際防災協力 ポートピアホテル 午後</p>	<p>津波から村人を救った「稻むらの火」の人形劇などを上演。子どもたちにもぜひ。要申込。同封チラシをご参考下さい。</p>
<p>地震・津波と悩むらの火 子どもワイワイサミット 神戸国際会議場 9:30~11:30 同封のチラシ参照</p>	

※各催しの詳しい内容については被災地NGO協働センター事務局 (078-574-0701) までお問い合わせください。

書籍紹介

阪神・淡路大震災10年
—新しい市民社会のために—

柳田 邦男 編

震災から10年、被災地は表向き蘇ったが、復興10年の現実は? 復興住宅、人びとの暮らし、経済・産業の復興、孤独死の問題など被災地の変化と到達点を市民の立場から検証し、震災の混乱の中から登場してきた「自立型市民」の多様な活動を紹介。

(岩波新書・224ページ・735円)

阪神・淡路大震災10年
—市民社会への発信—

震災10年市民検証研究会 編

NOW
PRINTING!2005年1月17日
刊行予定

同封チラシをご覧下さい

震災10年の体験から、次世代へ何を受け渡していくのか。くらしや地域に関する広範な分野で働いてきた市民活動の延長線上に「新しい市民社会」像が浮かんできた。迫り来る次の災害で一人も死なせない「震災の文化」を発信し、新しい社会の仕組みを構想し提案する。

(文理閣・1,500円)

今回の「ぞう通信。」はお休みいたします。